



室内用バイクでトレーニングする選手たち。左端が菊池コーチ



インターハイ自転車3連覇

松山城南高 揺るがぬ強さ

「日本の自転車界の常識を変えたい」

本番で出せれば優勝できる確信はありましたね」（菊池）
翌18年インターハイは、1期生が3年生となり、初めて3学年そろって臨んだ大会。他校に徹底マークされたが、つけ入る隙を与えず、当然のように2連覇を果たした。

真価を問われたのが、1期生が抜けた今年のインターハイだった。周囲には「たまたま1期生が強かっただけ」と戦力低下を予想する声もあった

だが、部員たちはそんな見方を吹き飛ばした。大会前には多くの選手が胃腸炎にかかり、普段の練習施設が改修で使えないなどの逆境を乗り越え、連覇を「3」に伸ばしてみた。

「伝統が生まれつつある」

菊池は強さの理由をこう語る。「一番大きいのは1期生4人が、手本となる選手のいない中で強くなったこと。続く選手たちはその4人を見て育っている。こうやれば日本一になれるという手本が身近にいたことで、下級生も最終的にレースをまじめに上げる底力をつけてきた。城南自転車競技部の伝統が生まれつつある。それが今年の活躍につながったと思っています」

連覇で注目度が高まって、全国から選手が集まるようになり、今年から1年生は最多の12人が入部した。初の女子部員となった大蔵こころは「日本一になった強い人と一緒に練習し、自分を追い込みたい」と長野県から入学。男子に交じって練習する中で力をつけ、今年のインターハイはロードレースで4位入賞した。

新チームで主将を務める岡本翔は「先輩たちが続けてきた連覇を自分たちの代で終わらせるわけにはいか

彗星のごとく現れたチームが、高校自転車界を席巻している。2016年創部の松山城南高校自転車競技部は、その翌年からインターハイの学校対抗で3連覇を達成するなど活躍を重ねる。急成長の理由は何か。練習の現場をのぞいた。

写真 多田良介

高低差250mを超える山道を、ロードバイクの集団が駆け抜ける。上つては下り、上つては下りを何往復も繰り返す。上り坂では息を喘がせ、顔をゆがめながらも、選手たちは力強くペダルを踏み続けた。
今夏のインターハイで学校対抗3連覇を達成した松山城南高自転車競技部。その練習は、やはり並大抵ではない。鮫島浩二監督はこう話す。「日本一過酷で厳しい練習をしていると思っっています。終わったらしばらくは立ち上がれない部員もいるほど。タイヤ差のレースで最後に力を出し切るためです」

城南に自転車競技部が誕生したのはわずか3年前、2016年だ。文字通りゼロからのスタートだったが、強豪になるための「萌芽」は見えていた。ひとつは、小学生の頃から全国規模の大会で活躍していた日野泰静ら有力な1年生4人が入部したこと。もうひとつが、外部コーチとして招かれた元競輪選手、菊池仁志の存在だ。

「魔法はありません」

菊池は競輪で最上位のS級に28年連続在籍したキャリアを持つ。「現状

ない。もっと力をつけて4連覇をめざします」と決意を語る。

菊池と二人三脚で部の育成に当たってきた監督の鮫島は大きなビジョンを描く。

「日本の自転車界の常識を変えたい」

国内のレースで多いのが、先頭の後ろについて体力を温存し、最後に前に出る作戦。しかし、鮫島は「そんなレースは世界では通用しません。うちの選手には、常に前に出て後続を引きちぎって勝てと言っています。小さな競技者にはなつてほしくないんですよ」と力を込める。

その思いは菊池も共有する。「創部当時から、部員には自分は日本で何番目なのかを意識しなさいと教えてきたし、今は世界での順位を考えなさいと言っています。国内だけで勝った負けたをやっていると、考



え方も狭くなるので、選手たちにはより広い世界を見てきてほしい。世界に通用する選手を輩出したいという思いは強いですね」

創部4年目にして揺るぎない強さを確立し、さらなる進化をめざす松山城南。緑ジャージの快走にしばらくブレキはかかりそうにない。

潜在能力のある選手と、彼らを着実に成長させる指導。城南のチャレンジは、2年目のインターハイで早くも実を結ぶ。エースの日野泰静がポイントレースとロードレースで2冠を達成。塩崎隼秀が4km速度競走、日野凌羽はロードレースとともに2位となり、犬塚貴之を含めた4km団体追い抜きが3位と1期生が大活躍。トラック、ロードの両部門を制する圧巻の勝ちっぷりで、学校対抗初優勝を飾った。

「普段から力を出せている選手たちだったので、その力をインターハイ